京都・長岡京跡 (3)

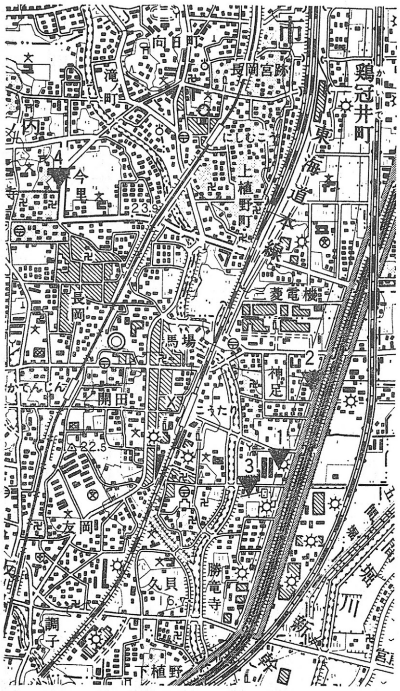
1 所在地　一 京都府長岡京市神足柳田、二 神足神田、三 神足木寺町、四 今里四丁目

2 調査期間　一 一九八八年（昭63）九月～一九八九年（平1）四月、二 一九八九年三月～五月、三 一九九〇年六月、四 一九九〇年五月～八月

3 発掘機関　㈶長岡京市埋蔵文化財センター

4 調査担当者　一 山本輝雄、二 白川成明、三 中島皆夫、四 木村泰彦

5 遺跡の種類　一～三 都城跡、四 古墳・都城跡



（京都西南部）

6 遺跡の年代　一～三 八世紀末、四 五世紀前半・八世紀末

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一　左京六条一坊十一・十四町（左京第二〇四次調査）

調査地は、JR神足駅の東方約七〇〇m、長岡京の左京六条一坊十一・十四両町にあたり、弥生時代から古墳時代の集落跡として著名な雲宮遺跡の範囲にも含まれる所である。調査は、左京第二〇四次調査として約三二〇〇㎡を発掘した結果、大きく古墳時代、長岡京期、近世の三時期に区分できる遺構を確認した。そのうち長岡京に関係するものとしては、東一坊第二小路の東西両側溝をはじめ、掘立柱建物一八棟以上、掘立柱塀一条、門一棟、井戸三基、土坑六基、溝九条、橋など数多くの遺構を検出し、十一・十四両町における土地利用の一端を知ることができた。

まず十一町では、東西溝で南北に分割された八分の一町、ないし一六分の一町規模と推察される小宅地を二区画分確認した。いずれの宅地内にも、井戸一基とその周囲に小規模な建物を数棟配置していたが、建物は南北棟よりも東西棟が多く、柱根や礎板が残るものも少なくなかった。特に北側の宅地は、小路沿いに掘立柱塀をめぐらして門を開き、三棟の建物で囲まれた空地には、土師器や銭貨を埋納した小土坑が四基あり、地鎮など祭祀に関係する遺構として注目された。

一方、十四町でも井戸一基と数棟の小規模な建物を検出している

が、十一町に比べて建物の密度が低く、しかも敷地を分割する施設を確認していないので、少なくとも四分の一町規模の宅地である可能性が高い。このような宅地や建物などの大きさからみて、五条以南にあたる当地一帯は、中級ないしは下級官人層の居住区域であったと考えることができ、この点は長岡京においても平城京の場合と同じく宮域から離れるに従って一区画の宅地面積が減少していくという傾向を指摘できる意義深い調査事例となった。

木簡（墨書のある檜扇）は、十一町の北側宅地内に設けられた井戸ＳＥ二〇四三七から一括して出土したものである。ＳＥ二〇四三七は、直径が約五・九ｍもある円形の掘形内に、一辺約一・二ｍの縦板組横桟どめ型式の井戸側を設け、水溜めには小判型の曲物を用いていた。共伴遺物としては、土師器や須恵器をはじめ土馬、手斧や錐の柄、独楽、斎串、横櫛、曲物の底板などがある。

ちなみに、その他の注目される遺物として、銅製品では錐・素文鏡・帯金具・鈴・銭貨、それに漆器の合子や「妹」「万」「□福」「十」と記した墨書土器などが出土している。

二　左京五条二坊四町（左京第二一二次調査）

本調査は、社屋増築工事に伴って実施したものである。調査地は、旧小畑川によって形成された緩扇状地上に立地し、左京五条二坊四町の推定地にあたる。検出遺構は、東二坊第一小路両側溝を含む長岡京期の溝四条、柵列四条である。東二坊第一小路側溝は幅〇・九ｍ、深さ〇・六ｍの規模であり、両側溝の心々距離は、八・九ｍを測る。埋土は、粘質系の上層、砂質系の下層とに分けられ、主な出土遺物は、須恵器・土師器・木簡・瓦・曲物の底板・銭貨などである。木簡は、西側溝下層より出土した。

三　左京六条一坊五町（左京第二四五次調査）

本調査は、左京第二四五次調査として行なった。調査対象地は、左京六条一坊五町推定地に相当する。

調査面積が小規模であったため、検出した長岡京期の遺構は、六条大路北側溝に推定される東西溝一条のみである。

六条大路北側溝は、幅一・三～一・六ｍ、深さ約〇・四ｍを測り、北岸にのみ護岸設備を施すため、北壁面は垂直に立ちあがるが、南岸側からは北にむかってしだいに深くなっている。護岸設備は、長さ約三・五ｍ、幅約二五㎝の板材を丸杭により留めている。調査範囲内では、板材三枚が確認された。

木簡は、六条大路北側溝から一点出土した。伴出した遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・鞴羽口・坩堝・土馬・曲物・人形・斎串などがある。墨書土器は、計五点が出土した。しかし、判読し得たものは、「継」一点に限られる。

四　今里車塚古墳（右京第三五二次調査）

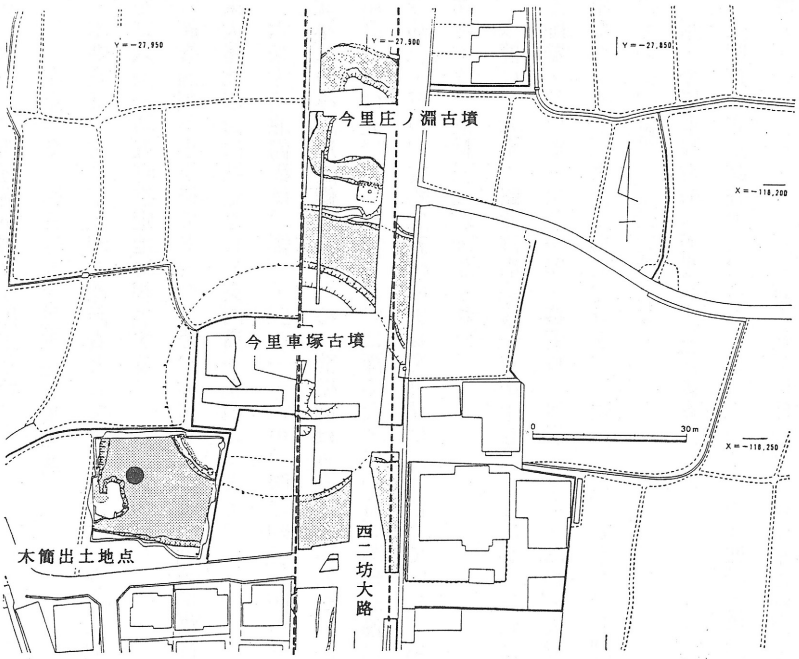
長岡京の発掘調査では、これまでにもいくつかの埋没古墳が検出されており、それらは長岡京の造営に伴い完全に削平されたものや

部分的に改変を受けたもの、また長岡京以降の削平によるものなどがある。今回報告する今里車塚古墳は、一九七八年の京都府教育委員会の調査で確認された五世紀前半の前方後円墳で、「木製の埴輪」が最初に出土した古墳として有名であるが、長岡京期に周濠が埋め立てられるという部分的改変を受けている。

古墳の位置は長岡京の右京三条二坊十五町と三条三坊二町にあたり、墳丘中央を西二坊大路が通る。そのため古墳の周濠の埋め立てが行なわれたようであるが、墳丘部はそのまま残されていたことが判明しており、また古墳の北と南で西二坊大路の側溝が検出されているため、調査を担当された高橋美久二氏は土盛を行なって墳丘上を大路が通っていたと推定されている。周濠内の堆積のうち長岡京期の埋土からはこれまでに人面墨書土器・人形・土馬などの祭祀遺物や二彩陶器の壺蓋が出土しており、埋め立て時に祭祀が行なわれたものと推定されている。

今回木簡が出土したのは、今里車塚古墳の後円部南西の周濠内で、右京第三五二次調査として実施したものである。調査では、周濠はほぼ推定位置で検出されたが、復原図よりも若干広いことが判明した。周濠内の堆積は基本的に六層あり、五～七世紀までの遺物を含んだ自然堆積層の上に、長岡京期の埋土（暗茶灰色砂質土）が約二〇cmの厚さで存在する。

この層から出土した長岡京期の遺物としては、土師器の杯・皿・



今里車塚古墳周辺図(1/1500図)

椀・高杯・甕、須恵器の杯A・杯B・蓋・壺G・壺L・壺M・平瓶・甕などがある。また墨書土器として、土師器の皿底部外面に「上三」と書かれたものがあり、おそらく土器の収納時の位置を示すも

のとみられる。ただ以前の調査と比べると遺物の量は少なく、また祭祀を行なったような痕跡もみられなかった。

8　木簡の釈文・内容

一　左京六条一坊十一・十四町

(1)　解申　請□　○　(150)×(23)×0.5　061

(2)　解申請銭合二百□□□　○　(152)×(24)×0.5　061

(3)　筆筆　○　(155)×(22)×0.5　061

(4)　筆筆　○　(154)×(25)×0.5　061

(5)　□飛〔為カ〕飛　家家為　□』　○　(148)×(19)×0.5　061

(6)　鯖鯛鮒鱒　『月月〔月カ〕□』　○　(155)×(27)×0.5　061

(7)　廣戀『□□兵兵兵□足』　○　(153)×(23)×0.5　061

(8)　・計　船埅塩□□□□□　○

・　□□　□　○　(150)×(24)×0.5　061

これらは、すべて檜扇の骨に墨書されたものである。骨の形態は、末が本よりも幅広い短冊形を呈するもの二一点と、末の片方を斜めに切り取ったもの一〇点（写真参照）に大別でき、前者はさらに大小に分けられた。いずれも非常に薄く仕上げられており、それぞれ要一孔と一対の綴目があけられていた。そのうち墨書は、大きい短冊形の八点に施され、うち一点のみが両面に認められた。墨書は、骨の左側に偏っているものが多く、このため文字の一端が欠けるものがある。この点からみて習書のある材を二次的に整形して檜扇としたのであろう。

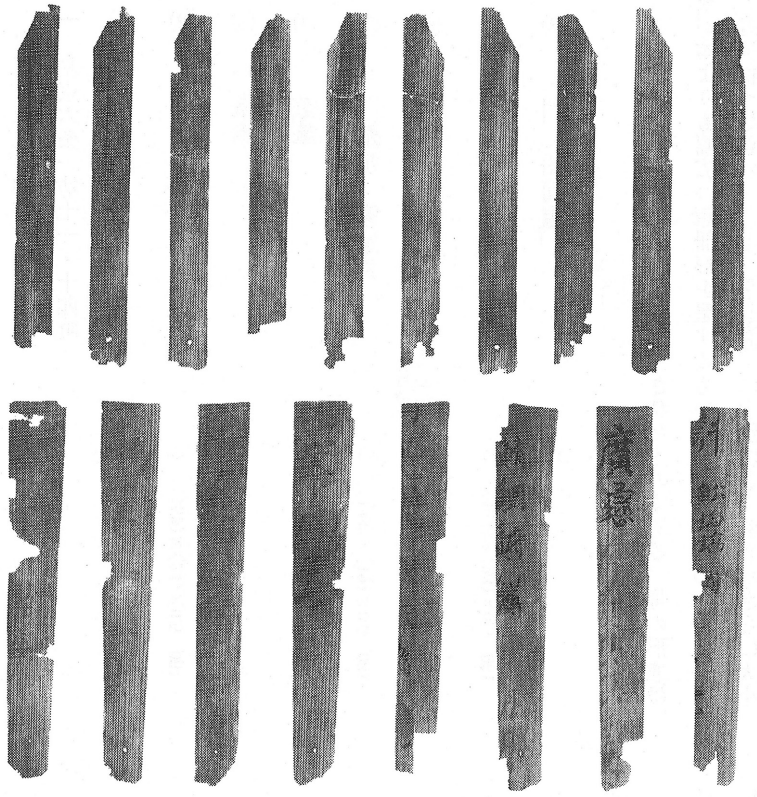
(1)(2)は、ともに墨痕が不鮮明であるが、下級官司から上級官司へ上申する際に用いる解文の書式であり、両者は同筆と考えられる。(3)(4)は、ともに文字が大きくて同筆である。(5)は、濃墨の「□〔為カ〕」以外は淡墨である。(6)は、「鯖鯛鮒鱒」が濃墨、「月月□〔月カ〕」が淡墨。(7)は、「廣戀」が濃墨であるのに対して「□□兵兵兵□足」は淡墨であり、両者は異筆と思われる。

釈読にあたっては、(財)向日市埋蔵文化財センター清水みき氏のご教示を得た。

二　左京五条二坊四町

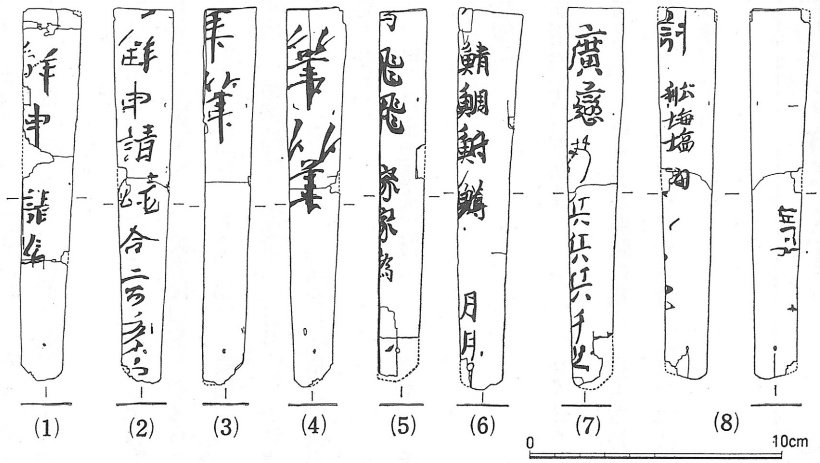
(1)　「〈阿波郡猪宍作料米五斗」　195×24×6　033

木簡は、荷札と考えられ、削り痕が明瞭に残る。猪宍作料は、中男作物の猪脯にあたるもので、『延喜式』主計上には、阿波国の中男作物の品目中に猪脯がある。



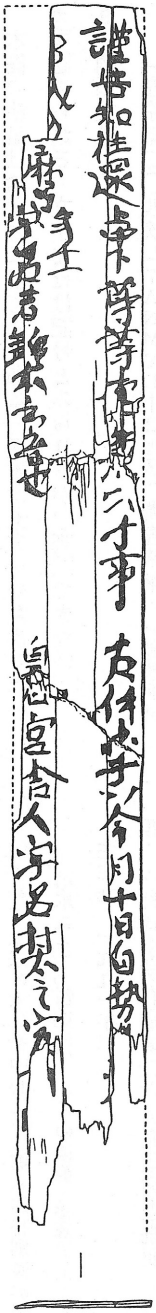
(1)　(2)　(3)　(4)　(5)　(6)　(7)　(8)表

檜扇（上段）と墨書檜扇（下段）



三　左京六条一坊五町

(1)　「謹告知往還上中下尊等御中迷□少子事　右件少子以今月十日自勢多□
錦□□〔織カ〕麻呂　年十一
字名者錦本云音也　皇后宮舎人字名村太之□□〔家カ〕□　(325)×35×2　019*



これは、「謹告知往還上中下尊等御中」の文言で始まる迷子の少子を捜索する「告知札」である。交通量の多い路傍で「往還」の人人を対象とした「告知札」は、これまでに牛馬の捜索を内容とした平安初期の例が知られている（奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅵ）。本例は、長岡京の条坊側溝から出土し、文中に「皇后宮舎人」とみえるので、長岡遷都の延暦三年（七八四）一一月から皇后藤原乙牟漏の皇后宮職が設置されていた延暦九年閏三月までの間に時期を限定できる。

接合部分は墨痕が薄く、下半も欠損しているが、文面には①「告知」の文言と対象、②告知内容―迷子とその特徴、③迷子となった日時・場所、④告知する主体が列記されている。下半を欠損しているため、迷子となった場所（近江国勢多……）と状況、及び告知主体（皇后宮舎人字名村太……）については、やや不明瞭な部分がある。古代社会において、字名が重要な意味をもったらしいことが知られるのも、本木簡の特徴である。迷子の少子は戸籍名と字名を記すのに対し、告知する側の皇后宮舎人は字名のみ記している。大型木簡であるにもかかわらず、厚さは一～二㎜と非常に薄く、実際路傍に掲示されたものか、その使用方法については検討を要する。

なお、木簡の釈読には、㈶向日市埋蔵文化財センターの清水みき氏のご教示を得た。

四　今里車塚古墳

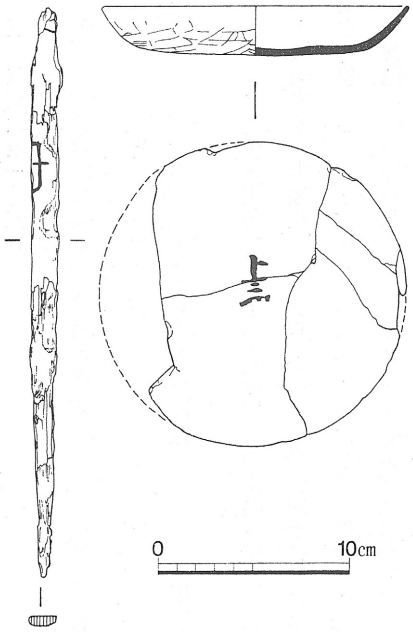
木簡の法量は(303)×(16)×6である。墨書は上方やや左寄りに一カ所認められる。文字または記号とみられるが、判読できない。

9　関係文献

一　「左京第二〇四次（7ANMYD—2地区）調査略報」（㈶長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和六三年度　一九九〇年）

長岡京市史編さん委員会『長岡京市史』資料編一（一九九一年）

二　「左京第二一二次（7ANMYB地区）調査略報」（㈶長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和六三年度　一九九〇年）



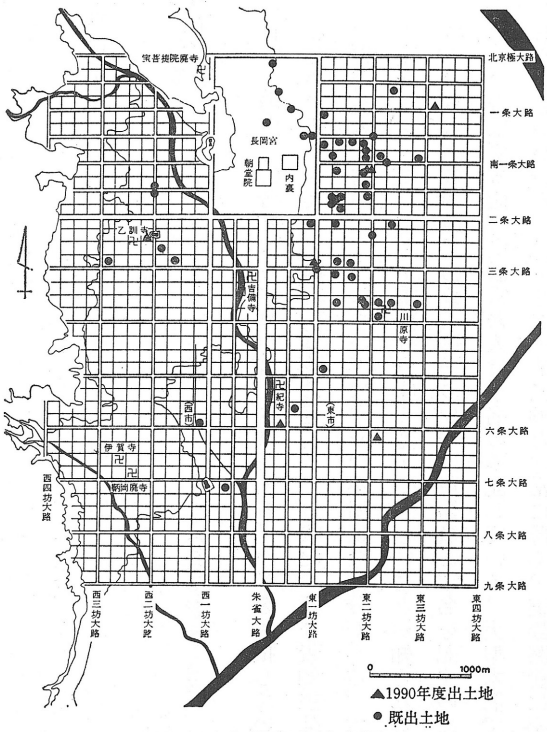
三　向日市文化資料館『木に記された歴史——中・近世遺跡出土の木簡や社寺伝来の木札を中心に』（第六回特別展示図録　一九九〇年）

清水みき「告知札——その機能と変遷——」（『考古学ジャーナル』三三九　一九九一年）

四　「長岡京跡右京第二六次発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報　一九八〇—二』　一九八〇年）

「長岡京跡右京第三五二次調査概要」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』二七　一九九一年）

（一　山本輝雄、二　白川成明、三　中島皆夫、四　木村泰彦）



長岡京跡木簡出土地点図